

共同研究 ● 近世カトリックの世界宣教と文化順応 (2014-2017)

近世カトリックの「適応」

ヨーロッパから当地〔日本〕へやって来る者たちは全くの新参者に等しいので、食事、着座、会話の仕方、服の着方、礼儀作法その他、日本人が行なうあらゆる事柄を、子供ようになって学ばねばならない。〔中略〕日本では別個の世界、別個の作法、別個の慣習や規範が通用しており、その結果、ヨーロッパでは礼儀正しく名誉あるものと評価を受けている事柄の多くが、日本では著しく不名誉で侮蔑的なものと見なされているからである。

この文章は16世紀に来日したイエズス会の巡察使アレックスサンドロ・ヴァリニャーノが同会の宣教師に向けて記したもののだが、「適応 *accomodatio*」と呼ばれるカトリックの宣教方針を簡潔にまとめている。いわゆる大航海時代、ヨーロッパ諸国はアフリカやアジア、アメリカへ本格的に進出するが、それと並行してローマ・カトリック教会も世界規模の宣教活動を展開するようになる。その原動力となったのは、ドミニコ会やフランシスコ会、イエズス会などの修道会である。修道会の宣教師たちはキリスト教を唯一真なる宗教とみなし、その他の宗教を「偶像崇拜」や「悪魔崇拜」としてみくだし、必要なら暴力に訴えて現地人の改宗を押し進めようとした。しかしその一方で、彼らは赴任先の国々の社会と文化を注意深く観察し、記録にとどめた。その意味で、近世の宣教師は現代の民族学者の先駆者とも呼べるが、彼らのそうした営みは、現地の規範や慣習を習得することで地元社会に溶け

込み、それにより現地人の改宗を促すという宣教方針としばしば結びついていた。この方針に従って、宣教師たちは現地語を学び、現地の衣食住を取り入れ、現地の礼儀作法に倣い、現地の法律を尊重し、現地の学問に精通しようとした。本研究の対象は宣教師たちのこの適応の実践と理論である。

アフリカやアジア、アメリカに渡り、現地の人びとと入り交じって暮

らしたヨーロッパ人が、現地の規範や慣習を習得し、模倣したのは、ある意味当然といえる。さもなければ、彼らの日常生活は重大な支障をきたし、彼らの生命すら危険にさらされただろうから。他方、宣教師の適応が興味深いのは、それが文化的に異質な環境で生き延びるための実践的な方便にとどまらず、宣教方針として明確に定式化され、合理化され、擁護された

からである。キリスト教に馴染みがない現地人の不信や反感を買わないよう慎重に行動すべきこと、信仰が着実に根づくよう初歩から応用へ段階的に教化活動を進めるべきことなど、適応にはたしかに便宜的な側面があった。しかし、現地の社会と文化を肯定的に評価し、それを新たなキリスト教国建設のための基盤にしようとする意志もたしかに存在したのである。社会的秩序や文化的洗練、宗教的真理はヨーロッパ人の特権ではないという認識は、近世カトリックの適応がヨーロッパにもたらした重要な知的貢献といえるだろう。

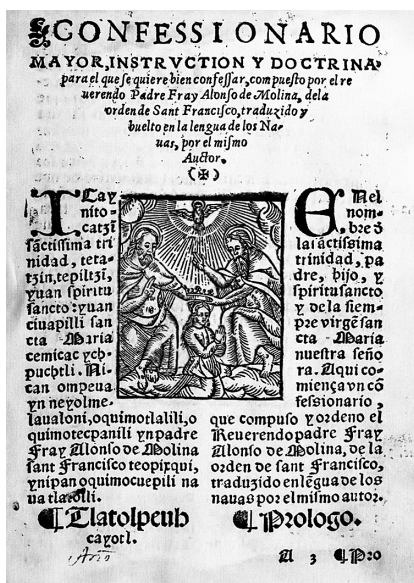
目的・方法・意義

本研究の目的は、大航海時代から啓蒙時代までのアジアとアメリカにおけるカトリックの適応に焦点を当て、ローカルな事例の比較とヨーロッパの文明観・人間観の検討を通じて、その歴史的意義を明らかにすることである。近世カトリックの適応はしばしば今日の文化相対主義の先駆けとみなされるが、この評価は正しいのだろうか。両者の共通点と相違点はなんだろうか。今日の相対主義的文化概念が近世カトリックの世界宣教に負うものがあるとするれば、それはなにか。これらの問いに答えるため、本研究は、宣教師の適応をローカルなコンテキストに位置づけ、通文化的実践としてのその特徴を探る。それとともに、宣教師が適応に与えた理論的根拠を世界の諸文化の多様性についてのヨーロッパの思索の流れに位置づけ、その思想史的意義を解明する。

本研究の方法論的特色は、一見して対照的な宣教方針が採用されたアジアとアメリカを比較する点、そして両地域の宣



アレックスサンドロ・ヴァリニャーノ。1539年、イタリアのキエーティに生まれ、1606年、マカオに没する。Adolfo Tamburello, M. Antoni J. Üçerler, Marisa Di Russo (eds.), *Alessandro Valignano S.I., Institutum Historicum Societatis Iesu*, 2008.



スペイン語とメキシコの先住民言語で作成された告解の手引書。カトリックの宣教師は赴任先の国の言語を学び、それにより宣教活動を押し進めた。Alonso de Molina, *Confessionario mayor en la lengua mexicana y castellana*, Pedro Balli, 1578.

教現場における通文化的実践を世界の諸文化の多様性についてのヨーロッパの思索と照らし合わせる点に存する。

まず第1の点についてだが、アメリカでは宣教師は現地の文化に適応するよりそれをヨーロッパの文化で置き換えることを重視したといわれている。従来の研究では、この姿勢の違いは植民地支配の有無やヨーロッパの基準でみた現地文化の洗練度の違いに帰せられ、現場における実践や言説がどの点でどれほど違っていたかが慎重に検討されることはなかった。本研究では、アメリカを比較対象とすることで、アジア中心だった従来における相対主義的文化概念の時代錯誤的援用を退けるとともに、宣教師の個人的才覚が過度に強調される傾向を修正する。そして、単純な二元論を回避し、排斥と寛容、自文化の強制と異文化への適応のバランスや緊張関係を把握するよう努める。

次に第2の点についてだが、ヨーロッパの海外拡張が明るみに出した人類の著しい文化的多様性は、神が創造した世界の単一性という神学的テーゼの再検討を促した。本研究では、新たな博物学的知識と旧来の宗教的世界観を折衷させようとするヨーロッパの思想家の知的営みを、アジアやアメリカの文化に適応しつつ現地人を改宗させようとする宣教師の実践的営みと照らし合わせる。そのうえで、人の移動や情報の伝達を具体的に辿ることで、両者の関係を実証的に把握する。それにより、ルネサンスから啓蒙思想へ至るヨーロッパの文明観・人間観の変遷においてカトリックの世界宣教が果たした役割を解明する。

近世カトリックの世界宣教、とりわけ適応について学ぶことは、今日的意義をもつひとつの問題への解答を探ることにつながる。すなわち、人類共通の普遍的価値があるという信念を放棄することなく、文化の多様性を尊重することはいかにして可能か、という問題である。相対主義的文化概念は、ある文化がその慣行や価値を普遍的と称して他の文化に押しつけることの欺瞞性を暴露した。しかし同時に、文化の名を冠する慣行や価値を批判する道義的根拠を掘り崩した。その結果、文化相対主義の名のもと人権侵害が容認されるという皮肉な事態を招いた。大航海時代から啓蒙時代にかけて世界各地で活動したカトリックの宣教師は、普遍主義と相対主義の相克というこの問題に彼らなりのやり方で答えようとした。すなわち、スコラ学の普遍的枠組みに沿って世界の諸文化の多様性を理解しようとした。他者を改宗させるため他者に適応するという彼らの試みは基本的に矛盾しており、普遍主義と相対主義のバランスは終始不安定だったが、一部の地域では束の間の成功を収めることができた。その試みについて学ぶことは、今日われわれが陥っている「文化の窮状」から抜け出すひとつの道を示してくれるだろう。

研究項目

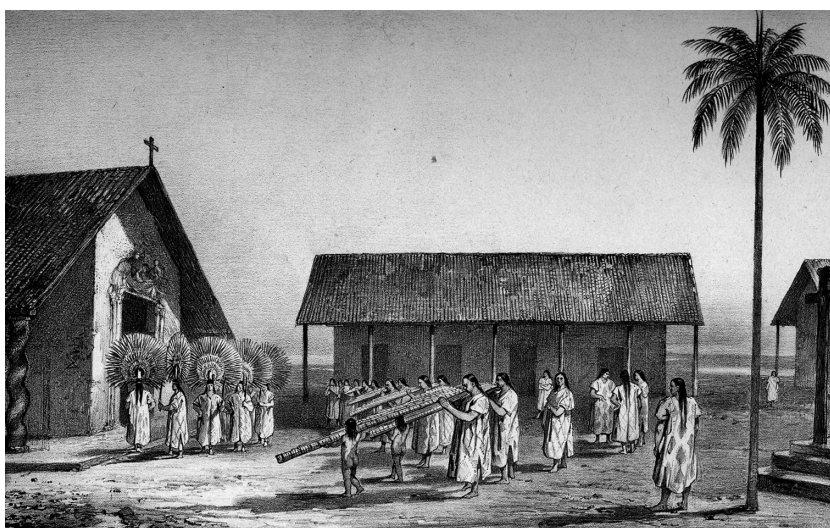
本研究では、以下の4つの項目を重点的に考察する。

項目1：異文化認識の変遷。アジアやアメリカの宣教現場で活動した宣教師や指導的立場にあった聖職者は、ヨーロッ

パ文化と現地文化の差異をどのように認識し、それにどう対処したのか。許容される差異と許容されない差異の境界はどこに引かれ、それはどう合理化されたのか。全体として、近世カトリックの世界宣教は、それ以前の時代とは異なる新たな異文化認識を生み出しえたのか。

項目2：宣教と適応のジレンマ。キリスト教の宣教（他者に自文化を受け入れさせること）と現地人の生活様式への適応（自己を異文化に適応させること）はいかにして両立しえたのか。適応は現地の人びとを改宗させるための方便以上のものでありえたのか。現地文化への適応が宣教を骨抜きにすることはなかったのか。そもそも、現地の人びとが適応に値する文化をもつなら、キリスト教への改宗はなんのために必要だったのか。

項目3：現地の人びとの関与。現地の人びとは宣教師の適応にどのように関与したのか。適応方針の策定と実施において、宣教師の現地人協力者はどのような役割を果たしたのか。



南米アマゾン南西部のカトリックの祭礼。ヤシの葉のパンパイプやコンゴウインコの羽根飾りなど、在来の祭礼の要素が維持されている。Alcide d'Orbigny, *Voyage dans l'Amérique méridionale*, vol.8, P. Bertrand et V. Levrault, 1845.

宣教師の適応はしばしば現地の人びとによるヨーロッパ文化の選択的占有の追認にすぎなかったのではないか。適応の結果、現地の人びとの生活様式はどのように変化したのか。

項目4：ヨーロッパへの影響。長期的にみて、近世カトリックの適応はヨーロッパの人びとの文明観・人間観をどのように変えたのか。適応方針の支持者がしばしば広めた非ヨーロッパ世界のポジティブなイメージは、18世紀の啓蒙思想の伏線となり、結果的に宣教の根拠を掘り崩し、ローマ・カトリック教会の権威を失墜させることになったのではないか。

項目1と4はおもに適応の理論的側面、項目2と3は実践的側面にかかわるが、本研究では理論と実践を切り離すことなく、両者を常に対照させながら、議論を深めていく。

さいとう あきら

国立民族学博物館先端人類科学研究部教授。専門は文化人類学、ラテンアメリカ研究。共著に『南米キリスト教美術とコロニアリズム』（名古屋大学出版会2007年）、編著に『テキストと人文学—知の土台を解剖する』（人文書院2009年）など。